

絵葉書にみる 芦屋ひと昔

昭和15(1940)年11月10日に誕生した芦屋市は、今年で市制施行80周年を迎えます。芦屋市域は明治まで農村でしたが、芦屋市の前身である精道村のころ、明治の終わりから昭和のはじめにかけて、大阪や神戸の郊外住宅地として急激に発展しました。今回、カラー化した戦前の絵葉書から、ひと昔前の芦屋を紹介します。

問い合わせ 生涯学習課 ☎38-2115



阪神芦屋駅周辺の にぎわい (大正10年代)

現在の芦屋市役所東側の通りを南から見た風景です。

現在の尼崎信用金庫芦屋支店の並びには「御菓子司 かねや」や「チクオンキレコード」などの看板がみられます。奥には阪神芦屋駅の踏切と電車が写っています。日傘をさした和服の女性やハットを被った男性、洋服を着た子どもたちが行きかっています。

芦屋の浜辺 (大正)

芦屋の海岸は、古くは「漢人浜」と呼ばれており、古代から名勝地として広く知られていました。明治の終わりから昭和のはじめ、精道村が郊外住宅地として発展したころには、白砂青松の美しい景観が魅力の別荘地・名所となりました。また、芦屋浜では、避暑と健康促進を兼ねた海水浴が盛んに行われました。



業平橋と国道電車 (昭和10年代)

業平橋を東から見た風景です。阪神国道(現在の国道2号)は、昭和2(1927)年に開通しました。この道路には「国道電車」と呼ばれていた路面電車が通って

り、芦屋市域には「山打出」「芦屋駅前」「芦屋川」「津知」の4停留所がありました。

業平橋にあった芦屋川停留所に停まっている電車は昭和12(1937)年にデビューした阪神71形で、「金魚鉢」と呼ばれていました。当時の阪神国道は、自動車がほとんど走っておらず、和服姿の女性に混じり、洋服を着ている女性もいます。



現在の業平橋